

305. 平成13年度滋賀県下における 発掘調査の紹介 (その3)

16. 鴨田遺跡発掘調査概要

長浜市 鴨田遺跡

鴨田遺跡は長浜市の南西部、大戌亥町に所在する遺跡である。弥生時代中期から平安時代後期頃の集落跡及び墓跡として周知されており、昭和59年度から昭和61年度の調査では溝及び方形周溝墓群や自然水路が検出されている。溝及び自然水路からは弥生時代中期から弥生後期の遺物が大量に出土している。検出された溝は、楕円形に巡る状況から環濠集落と周知されている。

今回の調査は関西電力の送電鉄塔移設工事に伴う発掘調査で、工事の性質上調査対象区域は複数地域に及ぶ。この調査地は平成13年度調査予定区域の最も南の区域である。調査期間は平成13年11月20日から平成14年1月15日。調査面積は約120㎡である。

検出された主な遺構は、弥生時代中期の溝状遺構1条と鋤溝が数条である。過去に行われた基盤整備により遺構上面が若干の破壊を受けていたが、全体の概要はつかむことができた。溝状遺構は幅約3m、深さ約60cmの規模を持つ。過去の調査から環濠の一部と考えることができる。また、この溝状遺構は調査区東端で急激に浅くなっており、東壁断面ではほとんど確認できない。このことから付近に入り口のような施設があったことが予想される。

出土遺物は溝状遺構から若干出土した。壺や甕の他、



調査区全景

玉砥石などの石器が出土している。

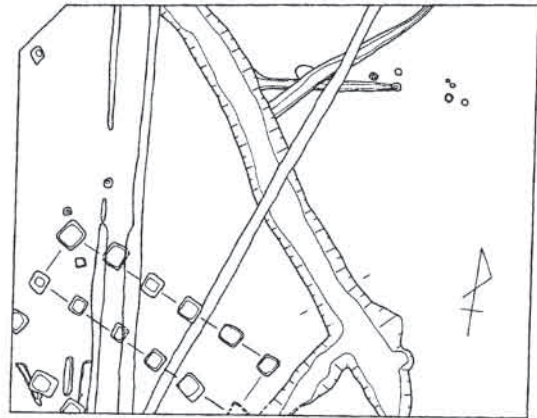
今回の調査は、北近江を代表する大規模な集落遺跡とされながら未だ中心部分の本格的な調査が行われておらず概要がつかめていない鴨田遺跡の貴重な資料といえるであろう。

(長浜市教育委員会 池寄陽一)

17. 大戌亥遺跡34次調査

長浜市 大戌亥遺跡

大戌亥遺跡34次調査は長浜市民病院西側の集合住宅建築工事に伴う調査である。今回調査を行った遺跡の周辺では、以前から工事に伴い発掘調査が行われていた。特に、今回調査を行った場所に隣接する北側の道路の下からは、区画溝が南北に伸びるかたちで検出されていた。また、東側の道路の下からも建物跡がまとまって発見されていた。このような発見が以前からされていたため、今回の調査においても期待がもたれていた。



全体図 S=1/300

今回本発掘調査を行って、確認した遺構は、調査区を南北に横切る区画溝、区画溝から派生した支流、枝分かれした溝、区画溝西側に5間×1間の倉庫跡、柱跡である。

今回確認した区画溝の幅は約1.5m、深さは0.6mである。柱穴は長約50cm、幅30cmの規模の柱が残存していた柱穴と長50cm、幅15cmの規模の柱が残存していた柱穴を確認した。

幅30cmの柱を持つ建物は調査区の南西側に位置す

る建物で、5間×1間の規模である。柱穴からは7世紀の須恵器の坏身が出土した。区画溝の中からは縄文時代晩期～平安時代までの土器や木製品が多数出土した。

今回の調査によって遺跡の広がりを確認したとともに、さらに南に区画溝が伸びることも判明した。今後の調査によって遺跡の全体が把握されることを期待したい。

(長浜市教育委員会 牛谷好伸)

18. 垣見氏館跡に関連する遺構の調査 長浜市 宮司遺跡

宮司遺跡は、縄文、弥生、奈良～平安、室町にわたる複合集落で、坂田郡衙推定値ともされている。また、調査地は垣見氏館跡の西側に隣接していることから、垣見氏関連の遺構が検出されると予測していた。

発掘調査は、個人住宅の建築に伴うもので、5本のトレンチを設定して実施したところ、コの字状にめぐる溝1本、掘立柱建物跡1棟、ピット群等の遺構を検出した。遺構の時代は、埋土中より16世紀代の土師器皿、瓦質羽釜、灰釉陶碗器が出土したので、その時期があてはめられるものとみられる。また、溝の幅は約1.2mから3mで、深さは約0.5mから0.7mであり、溝の内側に掘立柱建物跡とピット群が検出されたことから計画的に区画設定された遺構群であることが考えられる。おそらく、これらの遺構は東側に隣接する垣見氏館跡に関連するものとみられ、垣見氏が浅井氏に客将として招かれた時期に合致する。

さらに、垣見氏関連遺跡の発掘調査は城館跡では実施されていないが、支配集落と考えられる宮司東遺跡



検出した溝

で溝跡群、掘立柱建物群、ピット群と14～16世紀代の中世土器が出土しており、今回の調査では支配者側の垣見氏関連遺構が初めて検出されたことは、貴重であると言えるだろう。

そして、区画設定された溝と掘立柱建物はおそらく、身分等の違いから住み分けを行ったものと考えられそうであり、中世武士団の生活復原に役立つであろう。

さらにまた、城館の防御上においては、これらの溝が合戦において小さな防衛ラインを形成して、敵からの攻略を押しとどめる機能を果たすのではなかろうか。垣見氏関連の遺跡調査は、始まったばかりである。

(長浜市教育委員会 西原雄大)

19. 日本最古級の前方後方墳を発見 能登川町 神郷亀塚古墳

神郷亀塚古墳は、式内社乎加神社の北側に位置しており、現在も地元では「亀山」として親しまれている古墳である。古墳の西方約200mには、弥生時代後期から古墳時代にかけて湖東地方の拠点集落として発展した斗西遺跡・中沢遺跡が広がる。

今回の調査は、平成12年度に実施した詳細分布調査をもとに、より詳細な古墳の範囲、時期を確定する目的で平成13年11月より実施したものである。調査面積は775・であった。

調査の結果、当古墳は全長36.5m（前方部14.5m、後方部22m）、前方部幅18m、後方部幅25m、高さ5.3m（周濠底より）を測る前方後方墳であることが明らかとなった。また周濠の形態もほぼ墳形に沿うような形であることが判明した。周濠の後方部最大幅は12.5m、前方部最小幅は3mを測る。古墳の築造時期は、周濠最下層出土の土器等より3世紀初頭から前半と考えられ、最古級の古墳であることが明らかとなった。また周濠出土土器より3世紀後半と4世紀前半に古墳に対する祭祀行為が行われていたことも判明した。



神郷亀塚古墳

さらに6世紀中頃には、後方部周濠を中心に改修が行われ、7世紀中頃に埋没し始めることも確認できた。

以上のことから、古墳の築造からの祭祀行為の変遷を追うことができ、また古墳祭祀から隣接する乎加神社への祭儀の移行を考える上で貴重な資料となった。

(能登川町教育委員会 西 邦和)

20. 弥生時代後期の環濠の調査

能登川町 石田遺跡

石田遺跡は能登川町のほぼ中心部に位置しており、縄文時代後期・弥生時代後期から古墳時代初頭・中世の集落跡である。発掘調査は、能登川駅西土地区画整理事業に伴う道路・保留地部分等を平成10年度から実施しており、今年度が現地調査の最終年度になる(合計約16,800㎡実施)。

今までの調査では、弥生時代後期の河跡、環濠、掘立柱建物などが検出され、大量の土器や木製品とともに、木製品・青銅器生産関連遺物などが出土している。石田遺跡は琵琶湖(内湖)に接していることや、準構造船の竪板の出土から、湖上交通の窓口的な集落であったと考えられ、湖東地方の拠点集落である中沢・斗西遺跡の分村的な性格をもつ集落の一つであると考えられる。

今年度の調査で検出された主な遺構は、集落の北側と中央に流れていた河跡と、北側の環濠がある。環濠は3条確認されており、大量の弥生時代後期の土器や木製品、柱状片刃石斧などが出土している。

また、昨年度に調査を実施した南環濠部分から、埋土から弥生時代後期の土器に混じって縄文時代後期の土器と土偶(残存高5.9cm、写真右)が出土した。以前にも土偶(高さ5.1cm、写真左)が1点出土しており、周囲に縄文時代後期の集落が存在していることから、環濠が埋没する過程で混入したものと考えられる。

土偶は両手をあげた状態で、頭部は三角形に尖らせて表現をしており、表と背面、肩部に細かい管状の棒で入れ墨とも考えられる文様を表現している。この土偶は、整理作業中に発見されたことから、5月に一般公開を実施した。

(能登川町教育委員会

杉浦隆支)

環濠から出土した土偶

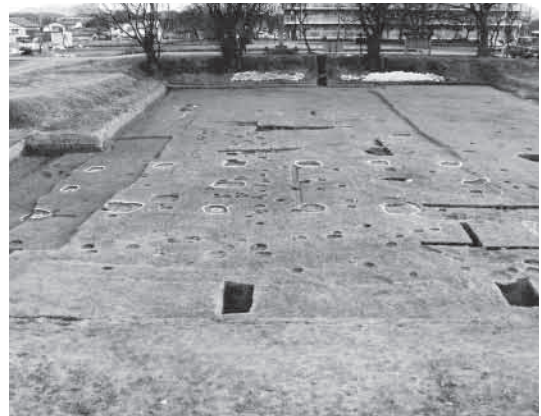
(右側)

21. 政庁北側で建物跡を検出

大津市 史跡近江国庁跡

平成8年度から実施している史跡近江国庁跡調査・整備事業の6年目にあたる平成13年度は、政庁域の背後北側にあたる部分対象(約4,800㎡)を中心に発掘調査を行った。調査対象地の一部は昭和50年代に発掘調査が実施され、小鍛冶跡等の遺構を確認している。しかし、政庁後殿跡の真北(真後ろ)部分は未調査であり、当該地における遺構残存状況の確認とその空間利用についての資料を得ることを目的とした。

まず、政庁域とは約2m程低くなっている政庁後殿跡真北部分では、現況の段裾部から約15m部分には当該時期の遺構は認められず、遺構はそれよりも北側に集中している。このことは、今回新たに確認した政庁域を囲む築地塀の北東角部の位置関係等からも、現況の地形はかなり開墾・削平されており、政庁後殿の背後には、約20m程度の空間が存在していたことが明らかになった。



政庁真北で検出した掘立柱建物跡(北から)



調査区北半部に集中するピット群の中で、一辺数十cm程度の大型方形ピットは極めて少ないが、政庁中心軸延長上の2間(約4.8m)×5間(約12m)の東西棟の掘立柱建物跡1棟を検出した。周辺には、土師器類と炭化物を多量に不定形の土坑が認められるが、この掘立柱建物を切り込んでいることから、共存していたとは考えられず、9世紀初頭頃の政庁域背面は建物等の施設が極めて散漫に存在していたと考えられる。

(滋賀県教育委員会 小竹森直子)

22. 松原内湖遺跡

彦根市 松原内湖遺跡

旧彦根藩の武家屋敷・火薬庫跡を中心に約15,000㎡を調査した。

武家屋敷は松原町に残る絵図で「今村忠右エ門」の記載のあるところに比定される。

調査の結果、谷の最深部に約50m×25mの広さを持つ、周囲を溝で囲った造成平坦地を確認し、ここに湖東流紋岩系の石材を基礎構造材に使った瓦葺の建物を3棟以上、出入り口階段、溝などの遺構を検出した。ここで検出された建物は規模に較べて、瓦の出土量が少ないところから、軒先等のみを瓦(棧瓦)を葺いた建物と想定できる。出土した陶磁器類から江戸時代末の施設であり火薬庫である「焰硝御土蔵」を管理する旧彦根藩の藩士が使用した武家屋敷と考える。

同じく絵図で「焰硝御土蔵」の記載があるところに比定される個所で火薬庫跡を検出した。谷の最深部に約60m×45mの広さを測る、周囲を溝で囲った造成平坦地となっている。

平坦地の正面は高さ2mの成型法面となっており、中央部に幅約8mの階段が設けられている。両側に3面石張りの側溝が付く。

内部に約5m×30mの規模の基礎を持つ細長い建物を並列で3棟検出した。火薬を貯蔵した倉庫と考えられるこの建物は、瓦の出土状況、基礎の状態から土壁、瓦葺(本瓦葺き)と復元できる。出入り口は長辺

の側に数カ所、また内部を仕切る壁の基礎と考えられる礎石を数石検出した。基礎の外周を構成する石材は武家屋敷と同じく外部から搬入された湖東流紋岩を使用している。

外周の溝は素掘りであるが一部に5m幅で石積みされた個所がある。これは橋台にあたり、橋が架けられていたものとする。

(財滋賀県文化財保護協会 横田洋三)

◇ あ と が き ◇

今回は平成13年度第80回の県埋文センター研究会で発表された22遺跡について報告していただいた。

弥生時代から古墳時代初頭では栗東市小柿遺跡の土器埋納ピットや野洲町小篠原遺跡の土壇墓群の報告は、この時代の祭祀や埋葬形態を考える上で貴重な例である。草津市柳遺跡では自然河道に作られた堰と大量の木製品の出土は大規模な水利工事が行われたことがうかがえる。

古墳時代では能登川町神郷亀塚古墳では日本最古級の前方後方墳が調査され、新旭町熊野本古墳群とともに古墳祭祀の形成や他地域との交流を考える上で重要な報告である。高島町打下古墳では箱形石棺とその内部に人骨が発見され人類学上でも意義深い。飛鳥・奈良時代では中主町八夫遺跡から瓦や奈良三彩が出土し八夫廃寺を考える上で参考になろう。

中世では草津市宮前遺跡や愛知川町市遺跡で鎌倉時代の農村集落の構成がわかる遺構群が、草津市野路岡田遺跡では古道に規制された建物群が報告され、近世では彦根市松原内湖遺跡の焰硝倉跡が報告された。いずれも中・近世史を考える上で貴重な資料である。

今回の報告が今後の調査をする上で参考になれば幸いである。また、今後もし早く貴重な文化財情報を提供できるよう心がけていきたい。



「 焰 硝 御 土 蔵 」